

四季・波留子^{はるこ}

quatre saisons

上



五木寛之

四季・波留子

quatre saisons

上

五木寛之

四季・波留子^{しきはるこ}
五木寛之^{いつきひろゆき}
上

一九八七年三月十日第一刷発行

定価 二八八〇円

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

〒一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五・一〇

TEL 〇三・三三八・二八四二 (出版部)

TEL 二三〇・六一七一 (販売部)

TEL 二三八・二九六四 (製作課)

印刷所 大日本印刷株式会社

著者との了解により検印を廃止いたします。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛に

お送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載
することを禁じます。

©1987 Hiroyuki Itsuki

Printed in Japan

ISBN4-08-772596-0 C0093

四季・波留子

上

ボスホラスへは行ったことがない

ボスホラスのことは 君 きいてくれるな

でも ぼくは海を見たんだけ 君の目に

碧の火の燃える海なのだ

—— C・エセーニン「ベルシャのモチーフ」より ——

序奏

〈布由子からの手紙〉

波留子^{はるこ}ねえさん、お元気ですか？

先日、病院のほうへ来てくださったとき、ちよつと瘦^やせたような感じを受けたので気になって
います。亜紀子^{あきこ}ねえさんは痩せてたほうが、らしくて素敵^{すてき}だけど、波留子^{はるこ}ねえさんはふつくらし
てるほうがわたしは好き。

このあいだは、ありがとう。沢木先生^{さわき}や看護婦さんたちにも気をつかっていただいてすみませ
んでした。

わたしは相変らずです。まあ、本当のことを書くと、あんまり調子が良くありません。ときど
き何もしたくなくなつて、ただ一日中ぼんやりと窓から外のトウヘンボクの木を眺めて過ごすこ

とがあります。

いま、トウヘンボクの木は裸です。いつの間にか黄葉したと思っていたら、或る朝、まるで下着を一気にぬぎすてるように、いっせいに落葉してしまいました。そして尖った細い手足を冬空にのびして、風に震えながら立っています。五月から六月にかけての、あのいやらしいほどの生命力を感じさせる若葉、青葉をまとった堂々たる姿は、夢だったんじゃないかと思わせるほどです。

瘦せて、枯れて、そのうち小枝の一本一本がバラバラと地面に散ってゆき、最後は電線のない電柱みたいな棒つきれになってしまふんじゃないかしら。

わたしはそんなトウヘンボクの裸の姿を、黙って窓ごしに眺めて暮しています。反対かな？ トウヘンボクのほうが、窓ごしに病室のわたしを見ているのかもしれない。

きのう、沢木先生の机の上にあった本をこっそり持ってきて、少しだけ読みました。

〈分裂病の少女の手記〉というその風変わりな本は、わたしにいろんなことを考えさせてくれました。わたしは、その手記の主ほど鋭敏な感覚の持主ではないようです。そのことがなんだか口惜しく思われてなりません。

本といえば、亜紀子ねえさんが拘留所からくれた手紙の中に出てくるセリーヌという作家について書かれたものを、いくつか読みました。亜紀子ねえさんから手紙をもらったのは、はじめてです。警察につかまって、ようやく読書や手紙を書く自分の時間ができた、と、彼女は自嘲的な調子で書いていましたが、そのことはとても良かったんじゃないか、とわたしは生意気にも

考えています。

わたしは波留子ねえさんや、奈津子ねえさんに対しては、いつも素直に甘えられるのに、なぜか亜紀子ねえさんにだけは逆らってみたくないとあるみたい。年がはなれていないせいでしょうか。それとも、あんまり頭の良すぎる彼女にヤキモチをやいているのでしょうか。

わたしは亜紀子ねえさん宛の返事に、セリーヌに関心があるなら、カート・ヴォネガット・ジュニアを読むべきだと書いてやりました。わたしのごひいきの小説家ふたりのうち、ヘスローターハウス5を書いたヴォネガットがセリーヌに強い影響をうけていると、どこかで読んだことを思い出したからです。

波留子ねえさんには、こんな話はずまらないでしょうね。文学趣味のひけらかし合いなど、きつと子供っぽく思えて退屈なさるにちがいありません。

ひとつお願いがあります。もし、福岡の書店でセリーヌという人の〈夜の果てへの旅〉という本が手に入るようでしたら、買って送っていただけませんか。手紙で亜紀子ねえさんと論争するためには、一応は目を通しておかねばならないでしょうから。

あの人はとても負けん気のところがありますから、どんどん喧嘩を吹っかけてやろうと思います。そのほうが拘束されている人間にとってはいいんじゃないかしら。わたし自身がずっとこうして病院で暮しているのです、そのことがわかるのです。その意味ではわたしのほうが囚人としては先輩なんですもの。

なんだかとりとめのないことばかり書いてしまいました。今夜は眠れそうにありません。いく

らでも手紙が書けそうな、変な気分です。

この後、亜紀子ねえさんに返事を書いて、それでも目が冴^さえていたら、ロスアンゼルス奈津子ねえさんにも手紙を書くつもり。

カルフォルニアへ行つて、かなりたちますけど、奈津子ねえさんは果して映画に出る糸口をつかんだのでしょうか。先月、送ってくれたスナップ写真では、スーパーマンのマーク付きのＴシャツを着て、ローラースケートなんかはいて、大得意の様子でした。まるで大きな子供みたいね。そのうちニューヨークへ行くことになりそうだ、って書いてありました。

では、これで書くのをやめます。父さんによろしく。お勤めをやめて、かえってせいせいしたんじゃないかしら。いづれ定年退職をひかえていたんですから、亜紀子ねえさんのゲバルト事件のことを教育者として責任とつてやるなんて必要なかつたみたいだけど、いやな電話が学校にまでかかってくるんじゃない。

人の心のせまさをつくづく感じます。せめてわたしでもちゃんとしていたら、父さんの囲^い碁^ごのお相手ぐらいできたのに。

それにしても今度の父さんの退職のことに關して、当の亜紀子ねえさんがまるで平然としてるみたいな気配なのは、びっくりしました。でも、わたしにそんなことを言う資格はないのです。波留子ねえさんが久留米の宮田家を出たことの本当の原因は、わたしが精神病院に入院していることにあるんですもの。波留子ねえさんのかけがえのない人生を、わたしがこわしてしまつた。そのことを考えると、本当につらいのです。ごめんなさい。でも謝つてみたところで、今さ

らどうしようありません。

わたしにできることは、一日も早く社会に復帰して、なにか世間の人々の賞讃をあびるような仕事をして、ねえさんを追い出した宮田家の人たちをがっかりさせてやること、それだけです。波留子ねえさん、わたしは必ずそうしてみせるわ。約束します。そして――、ああ、もうやめます。ごめんなさい。わたしのことは心配しないで。

沢木先生は、ねえさんのことを好きなんです。わたしにはいいから、先生には時どき電話でもしてあげてください。

それじゃ、これで。お疲れさまでした。

布由子より

〈波留子からの手紙〉

寒くなってきましたね。

布由ちゃん、あんまり具合が良くないって書いてたけど、でも手紙を読んだ限りでは元気そう。ねえさん、安心しました。

私は亜紀ちゃんや、奈津ちゃんみたいいろいろな知識もないし、本も読まないヒトなので、布由ちゃんの折角の高尚な議論も、豚に真珠です。だって、痩せたといったところで五十ンキロあ

るんですよ。

時には、ふっくらしてるなんてお世辞を言ってくれる人もいますけど、いずれにしてもあんまり洋服の似合う体型じゃないし、冬になるとコートなんかでごまかして澄まして歩いています。

久留米の宮田家のほうのこと、布由ちゃんが責任を感じることじゃ全然ないの。私が離婚した本当の理由は別にあるんです。恥ずかしいから手紙なんかじゃ書けないわ。でも、布由ちゃんの入院のことは、向こうのお義母さんの勝手な口実なんですよ。

じつは、結婚して半年あまりたった頃から、別れることを考えていました。嘘じゃありません。いつか布由ちゃんにそのことを話す日が来るかもしれないけど、彼と、お義母さんと三人だけの話合いで、絶対に他人にはもらさない、という覚え書きを交して出てきたんです。その秘密は、父さんにも話してはいません。

とにかく布由ちゃんは、何の関係もないことですから、勝手に責任を感じて自分を責めたりはして欲しくないわ。大人の世界には、あなたの想像もつかないような奇妙なことがたくさんあるんです。

約束よ。私の離婚の原因が自分の入院にあるなんて、絶対に考えないでね。どうしてもそんな気持ちから逃れることができない時には、私の口から本当のことを、誰も知らない私達の結婚生活の秘密をこっそり話してあげます。

実は私、もうすでにお義母さんや、彼との約束を破ってしまったの。布由ちゃんを診てくたさっている沢木先生に、どうしてだかわからないけど、突然、打ち明けてしまったのね。私は自

制心のない女なんでしょうか。

久留米の宮田家ととり交した覚え書きの約束を破ってしまったからには、離婚の時にとり決めた慰謝料も、月々送ってくれることになっている生活費も、受け取ることはできません。向こうに黙ってそんなお金をもらっているんじゃない、気がすみませんものね。

でも、心配しないでください。わが家の経済状態は目下きわめて良好ですから。

父さんには退職金がそこそこの額出そうですし、恩給や組合からの月々のお金ももらえます。

父さんは将来は西鉄沿線の小さな町に一軒家を買って、アパートをやるか、子供相手の貸本屋をやりたいと言っています。

そんなわけで、万事順調にすすんでいますから安心して療養につとめてください。

このところ、不思議に充実した日を送っています。自分の時間がぼっかりでき、自分の自由になる生活が目の前にあらわれて、どうしていいか戸惑いながらも、その気楽さを存分にたのしんでいます。

お料理を作ったり、父さんの盆栽の手入れを手伝ったり、これまで久留米の宮田家では考えることさえできなかった好き勝手な暮しです。こたつの中で、テレビの歌番組を見ながらおみかんを食べていたりすると、なんだか宮田家を出てきてはじめて自分の生活を取りもどしたみたいと感じ。

これからは父さんの世話をするだけでなく、自分自身のためにも生きてみようと思います。奈津ちゃんみたいにはいかなくとも、子供の頃からの優等生で、おしとやかな娘だった自分を、ち

よっぱり変えてみたい、そう考えているのです。

活字なんて、婦人雑誌ぐらいいしか読んだことがなかった私ですが、これからは少しいろんな本も読んで、布田ちゃんたちとせめてそんな話でもできる人間になりたいと思います。いろいろ教えてくださいね。

亜紀ちゃんに一度会いに上京するつもりでいます。拘留所というところには、暖房はいっているのかしら。いろいろなど差入れできるんでしょうか。あの子は昔から私のことを、自分だけ良い子ぶってるって、皮肉ばかり言ってたけど、子供を置いて離婚した今の私にどんな態度を見せるか興味があるわ。

父さんが呼んでる声がきこえます。最近、父さん、ときどき麻雀マイジャをするの。信じられないでしょうけど、父さんも私も、どうやら点数が数えられるようになってきたところ。

教えてくれたのは、金森商店の若社長になった達夫さん。奈津ちゃんと別れて、すぐお見合いして可愛いお嫁さんをもらったくせに、近ごろ何とはなしに家に遊びにくるのよ。実はこの家と地所も、ゆくゆくは達夫さんの会社で買ってくださいることになってるんです。父さんと妙に気が合って、友達を連れて遊びにきては、麻雀を教えてくださいます。おかげで最近、父さんのほうが麻雀にこっちゃって、大変。

今夜も達夫さんが店の若い男の子を連れて遊びにくることになってるんです。家庭麻雀って、とても楽しいわ。父さん、麻雀をおぼえただけでも教師をやめた甲斐があった、なんて言ってるくらい。

じゃあ、また書きます。風邪を引かないように気をつけてね。それから沢木先生によろしく。奈津ちゃんから新しいニュースがはいったら知らせます。お手紙にあった本のこと、ちゃんと書店の人に頼んでおきました。手にはいいたら送ります。

トウヘンボクの木さんによろしく。

波留子より

〈奈津子^{なつこ}からの手紙〉

布由ちゃん、げんきにしてる？

ロスアンゼルスにきて思うんだけど、布由ちゃんは幸福です。絶対に私、そう思うわ。あなたは幸せよ。だって、そうじゃないの。これから先の残り時間がはつきり宣告されてるわけじゃないんだもの。

突然こんな手紙をもらってびっくりしてるあなたの顔が目には浮かびます。

私、どうしても急に手紙を書きたくなったのよね。布由ちゃんでなくともよかったんだけど、あなたがなぜだか一番いまの私の感じてることを判ってくれそうなのがして。

私、ショックを受けてるのです。昨夜、ほとんど眠れなかったのよ。

だれかをつかまえて、大声で叫びたい気持ち。ケイがいればいいんだけど、彼女、この二、三

日、ラスベガスへギャンブルをしにいつてるの。

もつとも、彼女なら私が何を言っても平然とすることでしようね。空気みたいに私のヒステリックな声が、彼女の薄い体をつき抜けて行くんだわ。ケイは、ほんと、虚無そのものといった人間なのです。透明人間みたいなひと。

普通、手紙を書く場合は、時候の挨拶や、近況のお知らせからはいるものなのよね。ことに私たちの国の習慣じゃ。

でも、ここはちがいます。私がいまいるのはアメリカ。それもヨーロッパの真似をして得意がってる東部とはちがう、本当にアメリカらしいアメリカです。

言いたいことを言わなければ、言うことがない人間とみなされる国の気風に、私はまだ多少とまどっています。でも、大分なれたのよ。

そちらでは、かなり自己主張の強い人間のつもりだったけど、それでもやっぱり湿度の高い島の女だったのね。ここでは、自分が自分であるということは、それを他人に認めさせてはじめて成り立つのです。控え目しているだけで、自然と目立ってくるなんてことはありません。

肉体に時差がこたえるように、私も精神的な時差にいささか悩まされました。今はもうほとんど慣れてしまったけど。

話が飛ぶけど、がまんして読んでください。だって、ケイがいなくなつてからの何日間か、私、ひとことも日本語を使わずに暮してゐるんですからね。日本人はこの街にも沢山いますけど、私はあんまり彼らに近づく気持ちはないの。ケイもそう。で、二人だけで喋^{しゃべ}つてる時間が失^なく

つてしまうと、私は突然、音のない部屋に閉じこめられてしまったみたいになる。

布由ちゃん。

あなたは幸せよ。絶対にそうだわ。もちろん、私や、波留子ねえさんや、亜紀ちゃんもそう。だって、いま、自分の人生の終点をこの目で見てはいないんですから。

私がきのう出会った人のことを書きたいと思っています。その人を見たことで、私の人生観が大きく変りました。とてもショックだったわ。私、これまでいろんなことを考えて生きてきたつもりだったけど、そんなことが全部つまらないことのように思えてきたのね。そのことを説明させてちょうだい。

私たちの住んでいるのは、映画のプロデューサーと出版企画者を兼ねている、初老の男の人のお屋敷の一部です。彼は六十四歳で、なかなかチャーミングな人。

銀髪で、背は高くないけど、とても立派な横顔をしてるの。顔は陽灼^やけして、まっ赤です。もともとアルコール灼^やけかもしれないけど、私にはどっちでもいいことです。

彼はチャールズっていう、王子さまみたいな名前で、気位の高い白人です。奥さんとは二度別れて、目下、三度目の奥さんと離婚裁判の最中。

ケイとその人がどういう知り合いだったかは、想像がつきます。彼は五、六年前に日本で合作映画の仕事をし、その時からケイとのつき合いが生じたみたい。

彼、チャーリーって私たちは呼んでるんだけど、私とケイのアメリカでの宿泊の世話を快く引き受けてくれ、そのほか日常のこまごました面倒もよくみてくれます。男やモメの暮しに退屈し

てたんでしょう、きっと。

もう十年も前からベストセラーになって、今でもまだ売れ続けている本の企画・編集者なので、黙っててもその本が売れている間はお金がいってくるんですって。

へどうしてあんな退屈な本が売れるのか、ぼくにはわからんね

などと、自分で不思議がつてる人。

朝はきちんと七時に起きて、テニスをしてから食事。午後はプールで泳いだあと、オランダのジンをストリートで三杯、きちんと三杯だけクイクイツと放りこんで昼寝。夜は九時ごろからバーティに出かけて、夜中にへべれけで帰ってきます。

へチャーリー、あなたは何を目的に生きてるの？

と、私がいちど聞いた時、彼はしばらく考えたあとで、こう言いました。

「晴れた日に、ジンを三杯飲んで、昼寝をするためさ」

彼はもう自分の人生は終わった、と考えているみたい。だから私たちみたいな東洋のフーテン娘が二人も転がりこんできても、淡々と世話をしてくれるのです。

ケイなんか、ビキニもつけずにブルサイドをゆらゆら歩いてるのに、チャーリーはほとんど気にもとめていない様子。

へもう女はこりたからね

などと片目をつぶってみせるのですが、果してそれほど女性に関心をもった時期があったのかどうか疑わしいものです。ひよっとしたら、彼は少年の頃から女に関心がなかったタイプの男だ